

『メイドプレイ～ヒミツのご奉仕～』

著：藤村裕香

ひととおりのマッサージを習得した英夫は、一か月後リラクゼーションルームでデビューすることになった。

これまでの成果を発揮できるのを英夫は、楽しみにしていた。

「よろしくをお願いします」

ロッカールームに入ると、英夫は三人の先輩たちに頭を深々と下げて挨拶した。

四人だけしか使わないのに、ロッカールームはかなり広い。

「ひーちゃん、とうとう今日デビューだね。おめでとう」

三人は口々に言いながら拍手をした。

「リラクゼーションルームの制服を渡すよ。サイズはあってると思うけど一応着てみて、合わなかったら教えてくれよ」

くーは黒い服と白のエプロンを出して、英夫に渡す。

「こっ、これはなんですか？」

渡された制服を見て英夫は固まる。

フリルがついているのが気になるが、エプロンは良いとして、制服が黒いワンピースなのが英夫には信じられなかった。

「ワンピースだよ。ヘッドドレスと、ハイソックスとペチコートもあるからね」

くーは、まったく気にする様子もなく次々と英夫に服を手渡す。

「これは？」

落とさないように、それを必死で抱えて英夫は聞く。

「メイドさんだよ。お仕事で疲れた、皆さんを癒して差し上げるんだ」

ロンは屈託のない笑顔で答えた。

「ひーちゃん一人じゃない。大丈夫、僕たちも着るからさ」

つーは、にっこりと微笑む。

「えっ！ でも、わざわざこんな格好をしなくても」

たかがマッサージをするのに、なんでメイドの格好なんかしなくてはいけないのか英夫には分からない。

「疲れたみなさんを癒してあげるには、メイドが一番なんだ。秋葉じゃ、メイドリフレクソロジーなんて普通だし、美容師だってメイドの格好をしてるんだ」

ロンは、早口でまくしたてる。

「そう……」

英夫もこの間テレビでみたが、普通と言ってしまいうロンに違和感を覚えた。

「下着はこれにして」

リーダー格のくーは、二人より手早く着替えて靴を履くと、英夫に下着を渡す。

「これは女性用のパンティーでは」

服の上に無造作に置かれた小さな布を見て、英夫は顔を引きつらせた。

「そうだ。メイドさんがブリーフやトランクスじゃ興ざめだろ」

くーは、なんでもないことのように言う。

「.....」

そこまで徹底しなくてもいいんじゃないかと思いながら、英夫は渡されたビキニのパンティーを眺めた。

白地にお花模様がプリントされていて、左右は紐で結ぶようになっている。

「俺は今日、黒のTバックなんだ」

ジーパンを脱いで、楽しそうにロンは見せびらかした。

「ロンちゃん、えっちいっ」

きゃっきゃと笑って、つーがはやし立てた。

「うわっ」

白い肌に食い込む黒い下着が怪しくて、男同士でも目のやり場に困って英夫は視線を外す。

「早く着替えて用意しないと、ご主人様たちが来てしまうよ」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>